

チャイルドケアとアニマルケア

公益社団法人 日本動物病院福祉協会

(JAHA=Japanese Animal Hospital Association)

は1987年に厚生労働省より社団法人の設立許可を受けた動物病院の協会であり、動物を介在させたアニマルセラピーの活動を1986年以來行なっています。

具体的には、動物とふれあうことによる情緒的な安定や生活の質の向上を目的とする「動物介在活動」、人の医療現場で専門的な治療行為として行なわれる補助療法である「動物介在療法」、小学校等に動物とともに訪問し、動物との正しいふれあい方法や命の大切さを学び情緒教育としても活用されている「動物介在教育」を実施しています。

これらの活動は、動物の健康、福祉、教育にも配慮したものでなければならぬという方針を明確にし、それを具体化するマニュアルを作成し、活動を行っています。

また日小獣で推進している学校飼育動物についての講演を行います。

Child Care and Animal Care

JAHA is an association of animal hospitals set up with permission from Japan's Ministry of Health, Labour and Welfare in 1987. The Association had been promoting animal-assisted therapy activities with animal intervention since 1986.

In practical terms, JAHA conducts 'animal intervention activities' which aim to provide increased emotional stability and improve quality of life for people through contact with animals. It also conducts 'animal intervention therapy' (a substitution specialist treatment for human medical care), and 'animal intervention education' which, through training of emotions, teaches young people (by visiting elementary schools with animals) about the correct way to handle animals and the importance of 'life'.

All these activities are only conducted under the clearly understood policy that consideration is also given to the health, welfare and training of animals. The Association has produced practical manuals and, also in the educational field, provides lectures on keeping school animals.

ワークショップ
Workshop

VIII

■ ワークショップ VIII 「チャイルドケアとアニマルケア」

日時及び会場：12月13日(日) 13:00～16:00 501会議室

主催：公益社団法人 日本動物病院福祉協会

座長：柴内裕子氏 (公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 / 赤坂動物病院 院長)

法人サポーター：ロイヤルカナンジャパン合同会社

司会：戸塚裕久氏 (公益社団法人 日本動物病院福祉協会 CAPP 委員長)

スピーカー：

第1部：子どもたちに、意義ある動物体験を与えるために

中川 美穂子氏 (社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 /

全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)

「人と動物を大切に作るヒューマン・アニマル・ボンド教育の実践」

前川 哲也氏 (お茶の水女子大学附属中学校 教諭 (理科) /

NPO 法人 日本ヒューマン・アニマル・ボンドソサエティ (J-HABS) 理事 /

気象予報士 / 環境カウンセラー (市民))

第2部：21世紀子どもたちを支える動物たち 公益社団法人 日本動物病院福祉協会 CAPP 活動から

柴内 裕子氏 (公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 / 赤坂動物病院 院長)

「人と動物の健康と福祉と教育に役立つ伴侶動物 (子どもたちと動物)」

「アニマルセラピーの現場再現」

ワークショップデモンストレーションと CAPP 活動の現場

AAA, AAT, AAE 活動を療養士、CAPP セラピー犬、ボランティアの参加を頂いて再現します。

■ Workshop VIII "Child Care and Animal Care"

Dates : Sunday 13th December 13:00 ~ 16:00

Venue : Meeting Room 501

Organizer : Japanese Animal Hospital Association (JAHA)

Chairperson: Dr. Hiroko SHIBANAI (Advisor, Japanese Animal Hospital Association (JAHA) /

Director, Akasaka Animal Hospital)

Corporate Supporter : ROYAL CANIN JAPON, Inc.

MC : Dr. Hirohisa TOTSUKA (Chairperson, Companion Animal Partnership Program Committee,

Japanese Animal Hospital Association (JAHA))

Speakers :

Part 1 : 'Giving Meaningful Experiences to Children'

Dr. Mihoko NAKAGAWA

(Vice-Chair for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals,

Japan Veterinary Medical Association / Director, Nakagawa Animal Hospital /

Secretary-General, Society for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals /

President, Japanese Veterinary Council for School-owned Animals)

'Practicing Human-Animal Bond Education that Values People and Animals'

Dr. Tetsuya MAEKAWA (Science Teacher, Junior High School of Ochanomizu University Director,

NPO Japan Human Animal Bond Society (J-HABS)

/ Meteorologists / Environment Counselor (Citizen)

Part2: '21st Century – Animals which support children:

the CAPP activities of the Japan Animal Hospital Association"

Dr. Hiroko SHIBANAI (Advisor, Japanese Animal Hospital Association (JAHA) /

Director, Akasaka Animal Hospital)

'The Value of Companion Animals to People's Health, Welfare & Education (Children and Animals)'

'Animal Therapy Demonstration'

CAPP activity teams' occupational therapists, physical therapists, volunteers and therapy dogs,

will demonstrate the AAA, AAT, AAE activities.

抄録

柴内裕子氏	(公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 赤坂動物病院 院長)	4
中川美穂子氏	(社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 / 全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)	5
前川哲也氏	(お茶の水女子大学附属中学校 教諭 (理科) / NPO 法人 日本ヒューマン・アニマル・ボンドソサエティ (J-HABS) 理事 / 気象予報士 / 環境カウンセラー (市民))	7
柴内裕子氏	(公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 赤坂動物病院 院長)	8

記録集

・「子どもたちに、意義ある動物体験を与えるために」		
中川 美穂子氏 (社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 / 全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)	—————	13
・「人と動物を大切に作るヒューマン・アニマル・ボンド教育の実践」		
前川哲也氏 (お茶の水女子大学附属中学校 教諭 (理科) / NPO 法人 日本ヒューマン・アニマル・ボンドソサエティ (J-HABS) 理事 / 気象予報士 / 環境カウンセラー (市民))	—————	23
・「21 世紀子どもたちを支える動物たち公益社団法人日本動物病院福祉協会 CAPP 活動から」		
柴内 裕子氏 (公益社団法人日本動物病院福祉協会 顧問 / 赤坂動物病院 院長)		31
・「アニマルセラピーの現場再現」		
柴内 裕子氏 (公益社団法人日本動物病院福祉協会 顧問 / 赤坂動物病院 院長)		37

座長メッセージ

Chairperson's Message

柴内裕子 Hiroko SHIBANAI

公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 赤坂動物病院 院長

Advisor, Japan Animal Hospital Association (JAHA) Director, Akasaka Animal Hospital



アニマルセラピーという言葉が社会に浸透し、様々なところで耳にするようになりました。動物が人間にもたらす社会的、精神的、生理・身体機能的効果について注目が集まり、福祉や医療、教育の現場で需要が高まっています。

公益社団法人日本動物病院福祉協会は、公益目的事業として、アニマルセラピー（CAPP ボランティア活動＝Companion Animal Partnership Program）推進のための事業を行っています。本会では、この活動をその目的により次の3つに大別しています。

- ・動物介在活動（AAA / Animal Assisted Activity）
動物とふれあうことによる情緒的な安定、レクリエーション、QOLの向上等を主な目的としたふれあい活動。一般的にアニマルセラピーと呼ばれる活動の多くはこのタイプです
- ・動物介在療法（AAT / Animal Assisted Therapy）

The term 'animal therapy' has become well accepted in our society and is now heard in various contexts. There is much attention on the social, psychological, and functional benefits (physical and physiological) that animals have on humans and the demands for animal therapy in the fields of education, welfare and medical treatment are increasing.

JAHA (Japanese Animal Hospital Association) conducts CAPP (Companion Animal Partnership Program) activities as a public interest project to promote 'animal therapies'. JAHA classifies these activities to three types, based upon their different objectives.

- ・AAA / Animal Assisted Activities

These activities are aimed to achieve emotional stability, recreational benefits and QOL improvements through interaction with animals. Most so-called 'animal therapies' in Japan are this type.

- ・AAT / Animal Assisted Therapy

This is a supplemental medical treatment involving

人間の医療の現場で、専門的な治療行為として行われる動物を介在させた補助療法。医療従事者の主導で実施します。精神的、身体的、社会的機能の向上など、治療を受ける人に合わせた治療目標を設定し、適切な動物とボランティア（ハンドラー）を選択、治療後は治療効果の評価を行います。

- ・動物介在教育（AAE / Animal Assisted Education）
小学校等に動物とともに訪問し、動物との正しいふれあい方や命の大切さを子どもたちに学んでもらうための活動。生活科や総合学習などのプログラムとして取り入れる学校も徐々に増えています。

このワークショップでは、JAHAで行っている上記3つのCAPP活動の現場で活躍している、ボランティアとセラピー犬によるデモンストレーションを行います。ご覧頂いた皆様に、活動の良き理解者となって支援していただけることを願っています。

animal intervention used in specialized human medical fields, conducted under the supervision of medical staff. The treatment is aimed to improve psychological, physical or social function and is designed to suit each patient. Appropriate animals and handlers are selected for the treatment course, and the results are evaluated.

- ・AAE / Animal Assisted Education

These activities are visits to educational facilities (schools etc) to teach children how to handle animals properly and teach the importance of 'life'. The number of schools using this program as part of their 'Life Studies' or 'General Studies' classes is increasing.

During this workshop, volunteers and therapy dogs will demonstrate the above 3 types of JAHA's CAPP activities. We hope that the audiences will understand our activity and will give us their best support after attending this workshop.

第1部 子どもたちに、意義ある動物体験を与えるために

Part 1 : Giving Meaningful Experiences to Children

中川 美穂子 社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 /
全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰

Mihoko NAKAGAWA

Vice-Chair for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals, Japan Veterinary Medical Association

Director, Nakagawa Animal Hospital

Secretary-General, Society for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals President, Japanese

Veterinary Council for School-owned Animals



最近、人間と動物の違いは、額部分の脳の発達にあると言われていました。ここは自分の活動の源であり、また知能と行動を司るもの、いわゆる心（自我）があると判ってきました。アメリカで、ある人格者だった人が、額に鉄棒が刺さった事故のあと、全く粗暴な人間になったとの実話がありますが、ここの発達のない人は人格を形成する事が出来ないのです。脳学者によれば、この脳は、興味深いことを自分で追求して何かを発見し、工夫して楽しんでいると良く発達するそうで、何かを無理強いしてストレスをかけ続けていると発達しないそうです。発達できない場合は、何か一つの事しか考えられなくなったり、混乱してしまうようになるということです。この脳の発達はほぼ小学生までが大きく、それ以後の発達は容易ではありません。それで、「10才までの子どもを大事に育て、社会から守らなければ、その後はその子から社会を守らなければならないだろう」と言う言葉もあります。

その意味からも「幼児から小学校低学年の教育」は大事です。教育とは感動と感化を与えることと、教育者は言います。いまの教育界は「生命尊重の心を育む・自分で問題を見付け対処できる意欲と生きる力を培う」ことを大きな目標にしています。今、あまりにも酷い事件が多いからです。

また、次世代の理科離れが心配されていますが、あまりに動物と遊ぶ体験も、身体を使っての作業も乏しくなった結果、後に理科を理解する材料が頭にたまっていないからだとも言われています。親御さんとしても、大事なこの時期、色々な材料を子どもの傍にちりばめ、子どもが興味を持って追求する事を大事にしなければなり

ません。それが生きていく力の源になります。

「体験の伴わない、本や映像だけの知識は、知恵とはなり得ない」、また「得た体験が多いほど、後に教科書で習う事柄も難なく理解できる」、とも教育者は言います。人も動物の一種です。教育者によれば、動物体験は子どもにとって必要な体験の一つです。

なお、“ちゃんと世話ができるのか？出来るまで飼ってはダメ”という言葉をよくききますがそんなことを言っていたらほとんどの子は一生飼えないでしょう。それでは動物に対する理解も進みません。

ぜひ、大人が、子どもを育てる環境に「愛情の交流のできるペット」を置いて、子どもと一緒に育てて欲しいと思います。子どもさんが泣いて頼むならなお更、飼ってあげて感謝してもらってください。動物は子どもの心と直結しますから、おろそかに出来ない存在です。飼ってもらえたら、一生親に感謝するでしょうし、親御さんの都合で飼って貰えなかったら、一生納得しないでしょう。親御さんも一緒になって、小さな命を大事にして、子どもさんに弱い物にたいする庇う気持ちを味合わせてください。

なお、現行の小学校学習指導要領や幼稚園教育要領に「動物を飼うことと、植物を育てることが義務付けられましたが、飼育に際しては、「教育施設での動物飼育による教育を支援する」意味で、「地域の獣医師会組織による動物飼育に関する相談等を受け、支援する体制」が必要で、文科省も小学校学習指導要領の解説書に「支援を受けるように」と明記しています。現在、しっかり行政からの委託を受けて活動している獣医師会がみられ、他のほとんどの地方獣医師会でも、その体制に向けて準備を進めています。

It has been said, in current times, that the difference between human and other animals is primarily based on the way the forehead part of our brains develop. This part is the foundation of our action and also rules our intelligence. In other words, our sense of 'self' (ego) resides in that part of the head. There is a true story from America about a normally gentle and warm hearted man who turned into a crude and boorish character as a result of a severe harm for head (an iron bar piercing his forehead).

Insufficient development within that part of the head hinders personality development. According to brain scientists, this part of the brain develops well if people have something to discover, pursue and enjoy. However, if an individual suffers continuous and intense stress, this area fails to develop properly. Such subjects tend to obsess on one thing and they are often confused. This part of the brain develops in the time up to elementary school age but development beyond this period is not so easy. So it is often said, 'if we are not serious in bringing up our children to protect them from society, we will have to protect society from our children.'

From this, the careful education on early childhood (for infants and lower elementary school children) is significant. Educationalists say that the education is to give the child impression and the influence. As such, education has a big aim 'to nurture hearts that treasure and respect the lives of others, and to nurture motivation for solving problems with a zest to live'. This is necessary in the face of the multiple trials and tribulations in our lives.

There is also a concern about young people losing an interest in science. It is said that this is because children today have such little experience playing with animals or with any physical play. As a result they have inadequate 'material' in their brain for understanding science later on in their lives. So parents need to provide their children with an environment sufficient to help them develop an active interest for new things and for

nurturing an enquiring mind. These are the well-springs of human life.

Educationists say that 'It's not enough to survive, if knowledge just only based on books and images, and that 'the more experiences children have, the better they will understand their textbooks later on'. They also say that, because we human beings are also a species of animal, experience with other animals is essential for children.

Yet, when a child is asking for pet, their parents always say 'but can you look after the animal properly? You can only have a pet when you are mature enough to look after it well.' As the result children never have a chance to have a pet at last, so they never know about animals.

I hope more parents will keep pets (companion-animals) in the child-raising environment bringing up both simultaneously, to make a good communication between all. If a child is so eager to have a pet, or begs and cries to have one, I encourage parents to get the pet and let your child be appreciate. Animals can directly communicate with children, so they must be treated carefully. Getting a pet will result in a grateful child. Not getting one could trouble the child permanently. I hope that both of children and parents will treasure a small life.

Incidentally, current education guidelines in Japan (for kindergartens and elementary schools) obligate them to have animals and plants on the premises. In the case of keeping animals they do however need advice and support from a local veterinary association. Indeed, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology states have to be support' in their guidelines for elementary schools. So, today, there are some veterinary associations actively providing support and officially commissioned by their local authorities. And now almost of other local veterinary associations are also moving in the same direction.

人と動物を大切にするヒューマン・アニマル・ボンド教育の実践

Practicing Human-Animal Bond Education that Values People and Animals

前川 哲也 お茶の水女子大学附属中学校 教諭(理科)/

NPO 法人 日本ヒューマン・アニマル・ボンドソサエティ (J-HABS) 理事 / 気象予報士 / 環境カウンセラー (市民)

Tetsuya MAEKAWA Science Teacher, Junior High School of Ochanomizu University

Director, NPO Japan Human Animal Bond Society (J-HABS) /

Meteorologists / Environment Counselor (Citizen)



自然体験の機会が薄れているだけでなく、自然があっても積極的にふれようとしないう生徒が増えている。そんな生徒たちを前に、最も身近な自然の一つとしてペット（コンパニオンアニマル）とのつながりを通して自然や生命を大切にしようという気持ちを育みたいと考えた。そのような中で、HAB（ヒューマン・アニマルボンド）教育を提唱する獣医師と出会い、これをテーマとした授業を2年間にわたり企画・実施した。

These days in Japan, school students have less opportunity to come in contact with nature compared to children of the past, a deficiency made worse by the fact that, even when they do get the opportunity, many students do not attempt to make actual contact with nature. Standing before classes of such students, I knew that I had to try to instill some sense of responsibility for taking care of nature and living things within them. I have done this by building bonds between them and pets, probably nature's closest representative in people's daily lives. It was in this situation that I met up with a veterinarian who was also an advocate of HAB (Human-Animal Bond) education and, as a consequence, we have been planning and conducting classes with HAB as its theme for two years.

In my first year as a HAB education instructor for junior high school students, I conducted classes teaching students how to feel, realize and become aware of the

1年目は、中学生向けのHAB教育入門編として、言葉では表しにくい「生命」「生きていること」というものを体感・体得し、気づくことをめざす授業を行った。

2年目は、「人と動物の関係」により深く注目し、「野生動物はペットではない」「動物との死別」「動物を悪者にしない」の3つのテーマを設け授業を行った。

中学生ならではの既習知識や経験を生かし、生命や人と動物の関係について考えることで、人と動物のみならず、人と環境、そして人と人の関係が良くなることを願っている。

meaning of "life" and of "being alive" - concepts that are actually difficult to express in words.

In the second year, closer attention was paid to "relationships between people and animals" and we conducted classes following the three themes of "wild animals are not pets", "animal bereavements" and "how to ensure an animal grows up trouble-free".

I hope that junior high school students will make use of the knowledge and experience they pick up from these classes and that they will think more about life and the relationships between people and animals. Ultimately I hope this will lead to improvements, not only in relationships between people and animals, but also between people and the environment and between people and people.

人と動物の健康と福祉と教育に役立つ伴侶動物（子どもたちと動物）



はじめに

近年様々な場面で、人と動物との関わりが注目されています。理由は多岐に渡りますが、今、都市化の進み中、社会環境や家族の構成が都市を中心に著しく変化し、育ちゆく子どもたち、独居の人々、孤独な高齢者等が、自然を感じ、息づく命にふれることの出来ない少子高齢化、核家族化と集合住宅化の中にある現状です。加えて、家庭や地域社会の崩壊、幼児から高齢者にまで鬱病は増加し、情動の安定を欠き、判断力を失った人々が増えていることです。そのことは多くの障害を生み、更には低年齢化する非行や犯罪、その発生の温床が拡大していることです。それは、親になる自覚を失い、妊娠中、幼少時の子どもに哺乳類として受け継ぐ様々な絆、母乳、スキンシップ、家族の団欒などを見失った結果であり、学齢まで脳のハードが完成する社会化の感受性期に、体感・体得すべき家族としての教育が出来ていないことにあります。

永い歴史を共に歩んだ動物

人類は太古の昔から、豊かなそして時には危険な大自然の中で様々な動物たちとふれあい学び人間としての感性を身につけて来ました。近年、都市化が進み自然は遠のき核家族化の進む先進国では多くの問題を抱えるようになりました。

これらの問題の解決の一助に、伴侶動物が重要な役割を持つことが実証されて、人の健康や福祉、教育にも活用され始めました。

育ちゆく子どもたちは健康な動物たちとふれあい、暮らすことによって優しい言葉、思いやりの動作、忍耐や自尊心を育み、命に気付きます。

また、障害を持つ方や高齢の方々は動物とふれあうことで、心が和み、能動的になり、脈拍や血圧の安定、心臓発作後1年目の延命率の増加、生活のリズムを整える等々が医学的にも立証されてきました。動物たちは緊張を除き、人に内在する豊かな感性を上手に引き出す名手でもあるのです。

1978年に設立した、日本動物病院協会（現）公益社団法人日本動物病院福祉協会は1986年に医学と獣医学を通じて社会に貢献する活動として、Companion animal Partnership Program（CAPP活動）をスタートしました。CAPP活動は世界共通の理念と基準を取り入れ、動物介在活動（AAA）、動物介在療法（AAT）動物介在教育（AAE）を推進してきました。CAPP活動は、依頼された施設と打合せを行い責任者間で覚書を交わし、本会事務局より各地の会員獣医師または資格を得たボランティアがリーダーと連絡を取り、チームを編成して実施しています。

施設会員数（2009年10月現在）・・・169施設

内訳

高齢者施設 121施設

障害者（児）施設 22施設

こども（学校）1施設

病院 25施設

訪問回数（2009年3月末まで）

のべ訪問回数 10、279回

のべ獣医師参加人数 18,412人

のべボランティア参加人数 84,641人

のべ犬参加数 61,325頭

のべ猫参加数 15,464頭

その他動物参加数 5,829頭

今回はチャイルドケアに焦点を合わせていますので、小児病棟での効果、AAEとしての小学校訪問内容について、画面をもとにお伝えします。

Introduction

During recent years, in a variety of differing contexts, much attention has been paid to the relationship between humans and animals. The underlying reasons are diverse but with the advance of urbanization, the social environment and structure of families have seen dramatic change, especially in the big cities. We see growing children, single persons and old people alone in a society where, as the birthrate declines, the number of elderly folk is rising, and where nuclear families and collective housing are increasing. These people rarely have any contact with Nature, or touch other living things. Furthermore, homes and communities are collapsing and the number of people suffering depression is increasing, among both old and very young, with more and more people lacking emotional stability and sound judgment. Such issues in turn create many further problems and, furthermore, we have seen the age of juvenile delinquents (and their delinquent behavior) getting younger, a hotbed that is expanding. The reason for this is that parents themselves have been losing their sense of parenthood and have failed to provide sufficient bonding, for example, in terms of breast milk, physical closeness or family conversation. Small children during their most sensitive period of development, the time when their brain function and sense of social abilities are forming are missing out on experiences and sensations that are the basis of family education.

Our Long History Shared with Animals

Humans since ancient times have acquired the capacity to feel humane through their various direct experiences with Nature's animals, both those for their enrichment and those which are sometimes dangerous. As the urbanization of recent times has advanced, so Nature has disappeared and nuclear families increased, with all the resulting problems. To help solve these problems there is now evidence that companion animals can play an important role. These animals are beginning to be used to improve people's health, welfare and education. By living and having contact with healthy animals,

growing children can learn to talk gently, behave with consideration, exhibit patience, self respect, and to treasure life. Also, when people with disabilities or the elderly communicate with animals, they seem to relax more or become more engaged. From a medical standpoint it is now understood that people's blood pressure can stabilize. Indeed, the post one-year survival rate of heart attack patients has been shown to increase and their daily life pace more regulated. Animals, with their remarkable ability to bring out people's inner feelings, can loosen their tension.

The current Japan Animal Hospital Association, as founded in 1978, started the Companion Animal Partnership Program (CAPP) as an activity to contribute to society through medicine and veterinary medicine. CAPP, following policies and standards common worldwide, has been progressing Animal Assisted Activity (AAA), Animal Assisted Therapy (AAT) and Animal Assisted Education (AAE). CAPP programs are set up, first by holding meetings with the interested institution and an exchange of contracts between the executives. Then the CAPP Secretariat contacts the appropriate local veterinarian member (or qualified volunteer leader) who organizes the team to conduct the program.

No. of Membership Institutions (as of Oct. 2009) -----
169

Institutions for the elderly ----- 121
Institutions for people with disabilities ----- 22
Children (schools) ----- 1
Hospitals ----- 25

No. of visits made (up to end of March 2009)
Total No. of Visits ----- 10,279
Total No. of Participating Vets ----- 18,412
Total No. of Participating Volunteers ---- 84,641
Total No. of Participating Dogs ----- 61,325
Total No. of Participating Cats ----- 15,464
Total No. of Other Animals Participating ----- 5,829

As, on this occasion, we are focusing on child care I would like to show the positive effects gained at pediatric wards and schools that use AAE visits.

アニマルセラピーの現場再現

Animal Therapy Demonstration

柴内 裕子 公益社団法人日本動物病院福祉協会 顧問 赤坂動物病院 院長

Hiroko SHIBANAI Advisor, Japanese Animal Hospital Association (JAHA) Director, Akasaka Animal Hospital



【内 容】

アニマルセラピーの現場を実際に見ることを希望されている動物病院関係者や市民の方は多くても、ご近所に活動場所がないのが実情です。このセッションでは動物介在活動・療法・教育の現場を実際の作業療法士、理学療法

士、ボランティアやセラピー犬たちが参加し再現します。

活動現場再現

1) 動物介在活動（高齢者施設など）

一般的に多く行われている介在活動の現場を再現します。

[Contents]

Even though many animal hospital staffs and the public are interested in seeing the actual animal therapy activities, you cannot easily find the activities in your neighborhood. In this session, our CAPP activity teams' occupational therapists, physical therapists, volunteers and therapy dogs, will demonstrate the AAA, AAT, AAE activities.

1. Animal Assisted Activity (at homes for the aged / care facilities, etc.)

We will demonstrate the most common style of animal assisted activities.

2) 動物介在療法（医療施設）

現在、東京都内の病院にて実際に動物介在療法に携わっていただいております、作業療法士と理学療法士にご協力いただき、同病院で実際に行われています療法現場を再現します。

3) 動物介在教育（小学校など）

「3つのお約束」「犬とのごあいさつ」「さわってはいけない時」「こんな時は木になろう」など、犬との正しいふれあい方について地元の小学生にも参加していただき、再現します。

2. Animal Assisted Therapy (at medical institutions)

An occupational therapist and a physical therapist, who are currently working with us in a hospital in Tokyo, will help us demonstrate the animal assisted therapy, which is actually being practiced at their hospital.

3. Animal Assisted Education (at elementary schools, etc)

We will demonstrate few examples of our AAE, 'three things to promise', 'how to greet a dog', 'when you should not touch' and 'let's be a tree', with the participation of local elementary school students.

「チャイルドケアとアニマルケア」記録集

日時：12月13日(日) 13:00～16:00
場所：神戸国際会議場「501会議室」

ワークショップ
Workshop

VIII



ただ今より、公益社団法人日本動物病院福祉協会主催のワークショップ、「チャイルドケアとアニマルケア」を始めます。司会を務めます、戸塚と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

このワークショップでは、子どもと動物の関係に焦点を定め、その取り組みについて講演とデモンストレーションを行います。

なお、この「チャイルドケアとアニマルケア」のワークショップに対し、ロイヤルカナンジャパン合同会社よりサポートをいただいております。この場を借りて、御礼申し上げます。

それではこれより講演にうつります。まずは、「子どもたちに、意義ある動物体験を与えたるために」と題し、中川美穂子（なかがわ・みほこ）先生にご講演いただきます。中川先生は、学校での動物飼育に対する獣医師の、知識と技術による支援の必要性を重視され、獣医師会と行政による動物飼育支援体制の構築を計っていらっしゃいます。現在では、社団法人日本獣医師会小動物臨床部会の学校動物飼育支援検討委員会委員や社団法人東京都獣医師会の理事などをお務めでいらっしゃいます。

それでは、中川先生よろしくお願いいたします。



第1部 子どもたちに、意義ある動物体験を与えるために

Part 1 : Giving Meaningful Experiences to Children

中川 美穂子 社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長 / 中川動物病院長 /

全国学校飼育動物研究会 事務局長 / 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰

Mihoko NAKAGAWA

Vice-Chair for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals, Japan Veterinary Medical Association

Director, Nakagawa Animal Hospital

Secretary-General, Society for Humane & Science Education Utilizing School-owned Animals President, Japanese

Veterinary Council for School-owned Animals

2011/5/26

子ども達に意義ある動物体験を 与えるために



全国学校飼育動物研究会 事務局長
社) 東京都獣医師会理事
社) 日本獣医師会学校動物飼育支援委員会副委員長
中川美穂子

学校飼育動物とは

- **子どもの成長を助けるために**
- 学校・園で飼育されている動物たち
- 愛玩動物とも、家畜とも違う
- しかし、愛情深く扱わなければ、..
- @動物飼育の
- ****目的、方法、与え方**が大事**
- 何をどう飼うか

今、人が壊れようとしている

- 命がわからない・自己中心的
人とコミュニケーションがとれない
 - どうすれば良いか
愛情と共感を培う・命を教える
友達など周りとかかわる楽しさ
- を感じる神経回路を発達させる



筑波大学

子どもへの影響はなぜ？

- **動物が「かわいくなり」 大事な存在になる**
動物のために必死で工夫 認知能力 実感
こどもは庇われる存在だが、自分より弱いものをかばう
- **動物を介在しての三項関係をつくる**
友達や親との関係を助ける コミュニケーション促進
- **心的視点移動**
一緒にかわいがる(協力 人の気持ちがわかる)
動物の気持ちを考える
- なにより子どもにとって**動物は魅力的**で入りやすい

動物: その感情がみて取れる種類

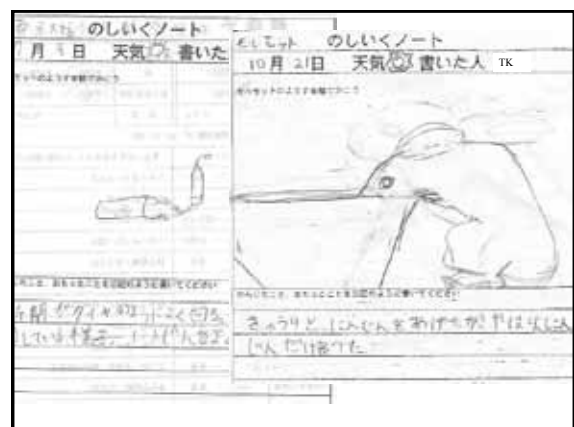
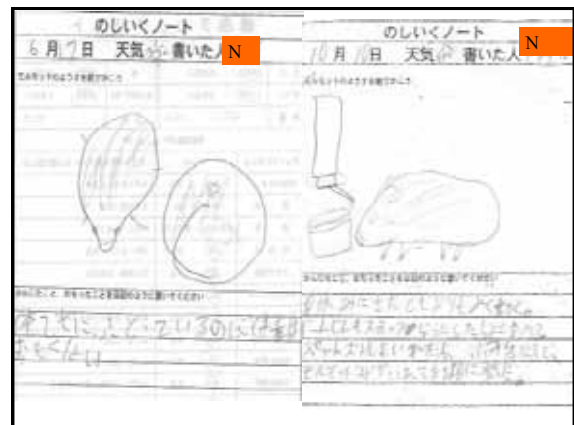
かわいい 笑い声のもれる楽しい飼育に 大変すぎる作業はさせない

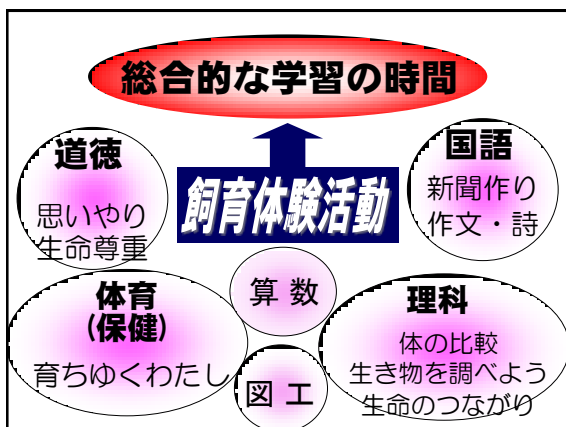
- 掃除しやすい飼育舎 ・・コンクリート床・巣箱
- **世話の簡単な種類**を少しだけ・・チャボとウサギ
- 繁殖を制限して、増えないように飼う
- 休日には保護者が当番児童につきそう
(教育参加)
- 地域の獣医師の助言と支援を**簡単に**得られる
体制をつくる(行政)

基本・子どもに**親しみ**を持たせる→ふれあい



継続飼育・金曜日には家に、そして日記





4年の総合の学習(飼育活動)

- 4月: ガイダンス * 動物とのふれあい教室
- 9月: 新聞作り * 獣医師が質問に答える
- 10月: 作文コンクール応募・兄弟活動1年生
- 11月: 学芸会・図工
- 3月: 下級生への引継ぎ集会開催
一ヶ月間、下級生と一緒に世話をする

休日のせわ * 親子ボランティア * 親子当番
方法







体の仕組みチーム
 チーム士
 ひな・親はなしチーム
 観察チーム
 うさぎトイレチーム
 にわとり三歩
 うさぎのふん対策チーム
 仲良しチーム
 包丁ときチーム
 ちゃぼウォッチング
 にわとりの飼い方
 しつけチーム
 えきプラボ
 すずめチーム

H18年度3学期
4年2組 発表

飼育…土は安全か?

チーム名 チーム士
根本 聡深 吉原 康太

調べたきっかけ
毎日、イエローとプラットがげりをしていた

↓

土のせいなのか?
にわとりが土を食べても安全なのか?

そこで…下痢のことを調べると

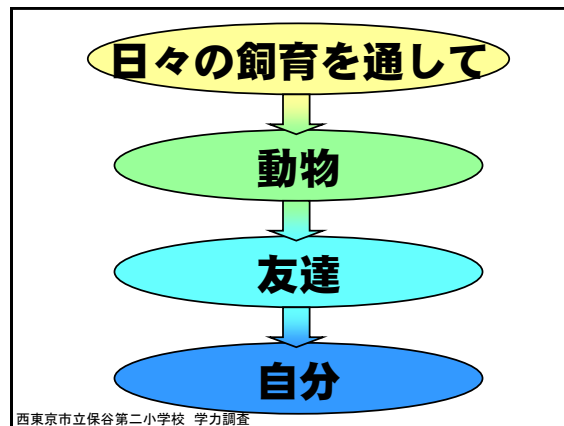
インターネットで・・・

春から秋に多い土の中にある
ウェルシュ菌が原因?

腸に行き、ひどい腸炎をおこす
若いにわとりに発生することが多い
口や傷口からうつる
血のまじって便をする

飼育で大切なこと 4年3組の発表

作文

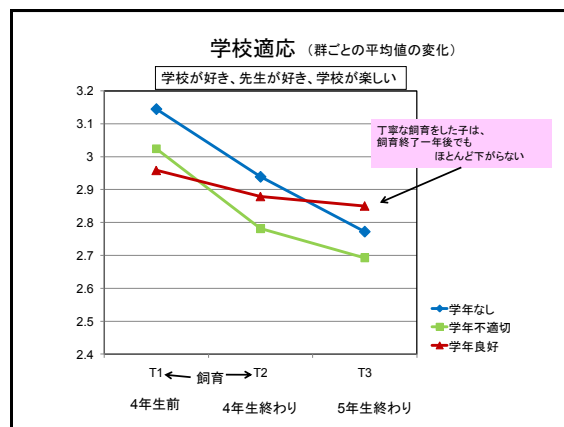


学年飼育体験が子どもの心理的発達に与える影響
学校動物との触れ合い・世話は、思いやり、適応を育むか？
 中島・無藤・中川(2011)

方法: 東京都下の12の小学校で4年生を対象に3回の質問紙調査
 T1: 学年飼育開始前
 T2: 1年間の学年飼育終了後 T3: 学年飼育終了から1年後

対象者: 学年飼育の有無と質を評価 → 3つの群に

- 学年飼育方式群(247名)**
 - 交代で学校動物の世話、導入時に触れ合い指導。
 - 明確な教育的なねらい。
 - 教員が指導的に関与。
 - 獣医師に相談、指導に従う。
- 学年方式不適切群(203名)**
 - 交代で学校動物の世話、触れ合い。
 - 明確な教育的なねらいはなし。
 - 教員の関与の薄さ。
 - 獣医師への相談はほとんどなし。
- 対照群: 委員会方式群(318名)**
 - 飼育は5・6年の飼育委員のみ。4年生は動物飼育にかかわりなし。



考察

学年飼育方式群: 対照群よりも、学校適応、他者への温かさの低下が小さい。動物への共感性が増加。
 → 動物や他者への思いやりを育む + 友との協力 + 学校が好き

学年方式不適切群: 対照群よりも、他者への温かさの低下が大きい。
 → 思いやりの発達を妨げる可能性も

学校動物との触れ合い・世話は思いやり、適応を育むか？

Yes! 適切な飼育で。

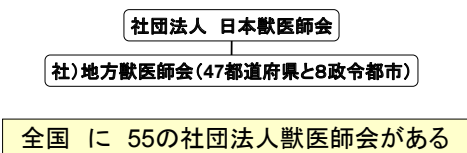
- 明確な教育的なねらい
- 教員の指導的な関与
- 豊かな触れ合い
- 獣医師に相談、助言支援を受ける

- 学校は、教育課程に位置づける
好きなor担当の先生だけではなく**全体で支える**
- 保護者が、「子育てのために」と理解して、**参加する**
休日の世話、アレルギー・衛生不安
(学年飼育・学年の親)
- 近くの専門家が、学校獣医師として支援する
(行政が学校の相談相手を派遣)
* 学校は費用を負担しないシステム)

園・学校での動物教育の意義

- ・命の大切さを学ばせる・**生命尊重** 責任
- ・愛する心の育成をはかる・**情愛** 自尊心
- ・人を思いやる心を養う・**共感** 謙虚 協力
- ・動物への興味を養う・・・科学への入り口
- ・ハプニングへの対応・・・工夫 **生きる力**
洞察力 決断力
- ・緊張を緩める・・・癒し コミュニケーション促進
- ・マザーリング (擬似育児体験) _____
子どもの心の状態の指標 (動物の種類は?)
- ・目を合わせられて感情を見せる動物(**必要**)
(小型)哺乳類と鳥類

獣医師会の組織



学校獣医師の活動目的

- * 「情を通じる飼育」支援
世話は面倒だけど、
可愛いからほって置けない
- * 人と動物にとって
心地よい環境管理法を伝え、
実現するよう支援する
- * 学校を守る



継続する愛情ある飼育活動は

- ・愛情を教える
- ・動物に懐かれて自尊感情を得る
- ・世話する楽しさを教える
- ・生命維持の作業の実際と大事さを教える
- ・人との協力・関わりを教える
(生物への常識と科学的興味を培う)

継続する愛情ある飼育活動は

- ・かわいいものは、かわいい!
- ・かわいそうなものは、かわいそう!
- ・と感じる
- ・ふつうの神経回路をつくる
- ・～すべての子に体験を～
- ・子どもは国民みんなの共有財産
- ・地域の獣医師もお手伝い



日本では二〇年ほど前から、「動物は好き」と言っても本物を怖がり、触っても、子猫の小さな爪が当たっただけで、「痛い」と投げ捨てる子どもが見られている。本当に痛みを感じたのか、小さな猫がそんなに怖い存在なのか、投げ捨てられた子猫の苦しみは想像できないのか？そこには生物への冷静な視点や思いやりの心、命を大切にできる態度は見られない。

また、園や学校からは、「台風一過だね」と難しい言葉を使う五歳児が、初めて抱いたウサギのスイッチを探したとか、たまごっちが死んだら涙するなどの話が聞えてくる。私自身、小学生に関わる中で、その学校の動物とのふれあい教室支援の後、ウサギを抱いた複数の一・二年生から「ウサギは何でできているの?」「どうして動くの?」と小さい声で質問されて、思わず「え?」と大声で聞き返し、泣かせてしまった事があるが、「人間と同じよ」というのが正解だったのだろう。この子たちは、映像の動物には夢中だが、実際の生きた動物には、少しも触れる機会がなかったのだ、と感じている。また、「ペットはマリモ」と答える何人もの三・四年生にも会ったが、生きた動物が傍にいないければ、動物への関心も湧かず、マリモが動物か植物かの見分けがつかないのだろう。逆に、教室内のモルモットを可愛がり、土日は家庭に持ち帰る丁寧な飼育をしている複数の教師は、動物が身近にいることで、子どもたちは、その他の生物にも関心を持ち、その動物が食べる植生（例、アゲハの幼虫が食べるサンショの葉）などにも関心が波及すると言う。

あの悲しい佐世保市の事件では、加害者の生命観の未熟さに驚かされたが、その後も、車の中に子どもを置き去りにし、熱中症で死なせたり、オートバイの座席の中に一歳の子を入れて窒息死させたり、スキーに出かけて十八時間も乳児を放置して死なせたなど、思ってもみない事件が続発している。これらは若い親世代を含めて、「人を含んだ動物らしさ」を理解できない人たちが増えていることを示している。

また近年、「温かい生きた体を抱いたのは、出産時が初めて」と話す若い母親が増えており、新生児への接し方指導が盛んに行われている。しかし、生後六カ月で保育園に来た時に「無表情の赤ちゃん」、あるいは「笑わない、反応が鈍い、筋肉が硬い」などの発達に障害がみられる赤ちゃんが年々増えている。この子らの親は、きちんと世話しても、抱いてあやすことを知らないと、障害矯正や保育の専門家は心配している。

一方、動物を可愛がって世話している子たちは、ウサ

ギやチャボでも、赤ちゃんのように抱いてあやすが、あのように小さい柔らかい動物の体を気遣いながら抱いて楽しめる子は、将来自分の子もあやして楽しみながら育てられ、愛着障害の心配は少ない。まさに命への親しみと理解は子ども時代の飼育体験のよるところが多い。

「動物を飼育させる時期と意味」

ノーベル賞科学者の小柴・田中両氏は「子どものときは野原で十分に遊んでいた」と述べているとおり、特に小学校中学年以下での遊びをとおして、子どもは森羅万象を理解する基礎を養ってきたといえる。

命の体験も家庭での動物飼育に期待するのが筋なのだが、日本では、大人が慰めで動物を飼う例が多く、子育て家庭での「感情交換ができる哺乳類や愛玩鳥（いわゆるペット）」の飼育率は減少している。世話の面倒さや「動物は不潔」との誤解が原因と考えられるが、小学校中学年の7割以上の子等はこれらの「抱ける温かい動物」を知らないまま育つのが現実である*1。その「隙間」でゲームやロボットが子どもたちを惹きつけるが、機械は飼い主に懐きも逆らいもせず、ボタンを押せばまた動き出すわけで、生き物の息吹も感情も伝えない。これでは、子どもの自己中心性は改善されず、生物学的好奇心も満たされず、まして「どきどきするような探究心」は生まれられないだろう。子どもの頭脳が発達するには、この「どきどきした探究心」が大きな原動力になるが、生きた動物が傍らにいないければ、生物への基本的知識は構築されず、冒頭のような命への無知をあらわす光景が繰り返される。

そのため園や学校での動物飼育活動が求められ、幼稚園教育要領、学習指導要領などに花、土、石、木、水、風、それに動物の体験、つまり自然体験と動物体験が明記されている。しかし、殊に動物体験は、その他と異なり、触りたくても動物が了解しないと触れず、子どもに他者を教える存在と言え。しかも、子どもの競争相手ではないため、無償の愛、思いやる気持ちを養う対象になり、庇われていただけの子どもにとって、庇いたくなる特殊な存在になる。子どもは、この可愛い他者のために、心と体と知恵を使って、労働を引き受け、他者の喜びを、自分の喜びと感じる体験を得る。

「園・学校での飼育体験の与え方」

時期：子どもが動物を飼いたがる時期こそ「生き物への興味や弱いものを思いやる気持ち、いとおしく愛情を感じる脳・感性」が構築される時期と認識して、幼児期から生活科時期と、小学校三・四年生の時期とに、親密な動物体験も与えると良い。

動物の種類：子どもの「心の発達と知識を刺激する目

的に適した動物は、人と視線を合わせて感情を表し、人に懐くことができ、かつ体温が温かい、抱いてほっとする種類とされ、欧米ではこの目的で、犬、猫、ウサギ、モルモット、馬などの哺乳類とブンチョウ、チャボ、インコなどの愛玩鳥を人の伴侶動物（コンパニオンアニマル）と呼んで、他の動物と区別をしている。また、世界の生物教育の最終目的「自分自身を理解できるようにする」には、人と同じ哺乳類が推奨されるが、四本足の鳥の絵を描かせないためにも、鳥類も、生物教育の基礎構築には重要だろう。なお、犬猫は特定の人の愛情が必要なので、教員の移動がある学校では飼えない。またアヒルやヤギなどの家畜は世話が大変過ぎるので、飼わない方が無難である。具体的には、飼育舎ではウサギとチャボ、教室内ではモルモットと文鳥が飼育に適切な種類である。

年齢と方法：（幼稚園から生活科）子どもが興味を持ち大事にする動物を身近に飼い、指導者も一緒に大事にしたい。子どもは教師に感謝し、一緒に心をかけて世話するうちに、様々な刺激を受けられるだろう。動物は、温和な性格で運動性も少なく、また、人を覚えて鳴き声をあげて歓迎するモルモットが飼いやすく楽しめる。

（三・四年生）好奇心も体力も十分なので、飼育舎のチャボやウサギたちを世話をさせる最適年齢である。「命の教育」として総合の学習に位置付けて全員で飼育体験をする「学年飼育」の成果が、全国学校飼育動物研究会に報告されてきている。この飼育は、世話の負担も喜びも学年全員で分け合え、教育的な効果が大きい。

（五・六年生）すでに成長が進み、今までの体験を知識として発展させる時期で、直接飼育舎に関わらせることはない。

支援方法：飼育始めには獣医師等から、「動物との付き合い方」の「動物ふれあい体験」の支援を受け、獣医師と親しむと良い。子どもが持つ疑問や心配などを、獣医師に相談できる体制があれば、教師も子どもも安心して、かつ知慾欲をより刺激できる。

「飼育の基本的留意点」

子どもは、動物が可愛いと感じてこそ、必死に動物を守るために工夫し、様々な教育的な効果を表わす。このような子は、飼育で一番うれしいのは「良いウンチをした時」と答える。これは子どもが動物の親になっていると言える。小学校では、子どもが心をかけて、わが子も思っている動物を、決して肉に供してしてはならない。

なお、大変過ぎる飼育活動は、弊害が大きく、教育的効果は殆ど見られない。子どもが十分に動物とふれあえるよう掃除を簡単にするため、飼育舎をコンクリート床

をにして、動物には防寒の巣箱を入れるなどの工夫が重要である。また、雄と雌の一家族ずつの部屋にして、繁殖を制限して飼い、争いが無い平和で楽しめる飼育にする。

「最後に」

著者等は、四年生対象の三年間の縦断調査で、「適切な学年飼育体験は、人への優しさや学校適応に良い影響を与える」「この効果は、家庭で飼育が無く、学校で適切な教育を受けた群で大きかった」と報告した*2。適切飼育校は、飼育活動を教育課程に位置付け、愛情をかけた飼育を継続するために、①飼育導入「ふれあい教室」（獣医師支援）を開催、動物の体と心を伝える②日常の世話とふれあいの継続 ③休日は「命には休みが無い」「命から目を離してはいけない」と理解させるために、保護者が世話に参加。（子どもが親に感謝したり、親が子どもの動物を可愛がる気持ちを理解したりと、親子の良い会話が報告されている）④一年生に兄弟授業でふれあい教室を行う⑤作文や図工に活用。⑥質問を獣医師に聞く授業で、理科的刺激を与える⑦期末に次学年への「飼育引き継ぎ集会」で、一年間の飼育体験をまとめて発表（教師にとっても成果の振り返りになる）などを行っていた。

自然体験、ことに命を理解させる動物体験は、子どもが体験したがる時にこそ、学校が地域の獣医師の支援を得て、良い飼育体験を与えてほしいと、子をもつ獣医師としては心から願っている。

*1 中川等「家庭での飼育状況」「動物飼育と教育」p・45 vol・6 2007

*2 中島・中川・無藤「学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響」日本獣医師会雑誌 p227—233 vol・64 No.3 2011

社）日本獣医師会小動物臨床部会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長
全国学校飼育動物研究会 事務局長
全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰

「学校飼育動物を考えるページ」

<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/>

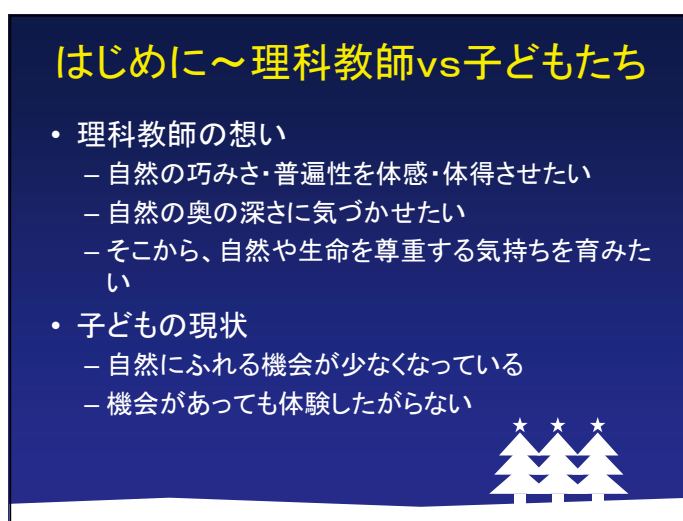
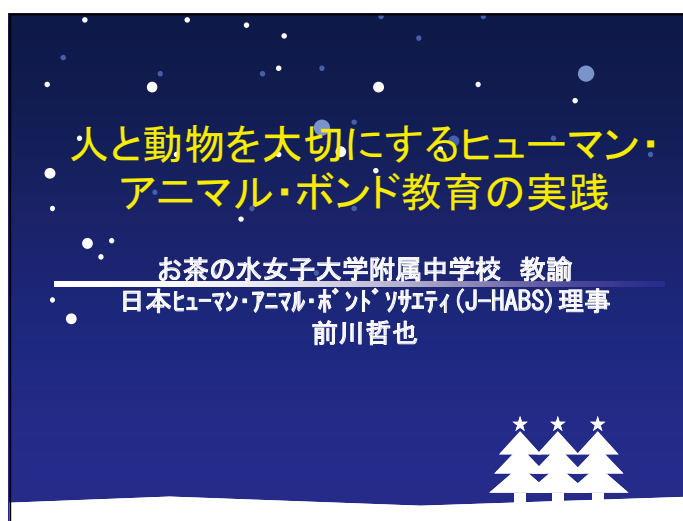
「全国学校飼育動物研究会」

<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/siikukenyukai.htm>

人と動物を大切にするヒューマン・アニマル・ボンド教育の実践

Practicing Human-Animal Bond Education that Values People and Animals

前川 哲也 お茶の水女子大学附属中学校 教諭(理科) /
NPO 法人 日本ヒューマン・アニマル・ボンドソサエティ (J-HABS) 理事 / 気象予報士 / 環境カウンセラー (市民)
Tetsuya MAEKAWA Science Teacher, Junior High School of Ochanomizu University
Director, NPO Japan Human Animal Bond Society (J-HABS) /
Meteorologists / Environment Counselor (Citizen)



子どもと自然を結ぶ

- 子どもたちにとって「関心のある身近な自然」とは？
 - コンパニオンアニマルに注目
 - 飼っていれば世話もしなければならない
 - 「生物」として意識されている
 - HABという概念
 - 生命尊重という理科教育が目指すテーマと合致



コンパニオンアニマルとの
HABをスタートに、自然を
大切にする気持ちを育む
授業ができないだろうか？



「つなぐ科」

- 教育研究による新教科「つなぐ科」にて2年間実施
- 「つなぐ科」は自分と学校での学びと社会生活をつなぐ目を育てる教科
- HAB教育は人と動物を「つなぐ」教育であり、相性がよさそう



1年目の実践

- 中学1年生4クラス133名が対象
- 「生命」「生きている」ことを体感・体得することを目指す
- 4回の授業
 - 生きているって何だろう
 - 自分は生きているよね？
 - 生きていることを実感しよう
 - 生きているから大切なんだ



第1回 生きているって何だろう

- 動物や植物にふれあった体験を出し合う
- 「生き物」と生きていないものとの違いを考える
 - 「生きている」の定義って難しい
 - だから体験的に感じ取っていきこう！



第2回 自分は生きているよね？

- お湯の温かさと動物の温かさの違い
 - お湯は冷める
 - (恒温)動物はずっとあたたかい
- 聴診器を使ってみよう
 - 自分の心臓の鼓動を聴いてみる
 - 機械の音、水の流れる音、木の音などを聴く



第3回 生きていることを実感しよう

- 初めての動物とどう接するか
 - 子どもたちの考えを専門家にぶつけてみる
 - いいと思ったことが実はよくないことも
- イヌの心臓の鼓動を聴いてみよう！



第4回 生きているから大切なんだ

- 3回目までの活動を写真やビデオで振り返る
 - イヌを前に、笑顔が多い
- 生きているって()
 - あたたかい 未来がある すばらしい
 - ハートがあること 心のぬくもりがあること
- 命って()
 - 一つしかないもの 虹のよう 感じること
 - みんなで守っていくもの



2年目の実践

- 1年目の実践では参加意識が高く、深く生命について考えることができた。
- 一方、自分の視点で動物を見ることが多く、動物(相手)の視点をもたせたい。
- 「人と動物の関係」に注目した授業を展開。
- 3回の授業
 - 野生動物はペットではない
 - ペットとの死別
 - 動物を悪者にしない



第1回 野生動物はペットではない

- 授業展開
 - ライオンを飼えない理由
 - イヌやネコはどうして飼えるのか
 - 動物園はどうなの？
- 指導上の工夫
 - 明確なメッセージ性
 - 理科の授業との連携



第2回 ペットとの死別

- 教材
 - 「ぼくはネコのバーニーが大好きだった」
 - 「ずっとずっとだいすきだよ」
 - 共通点と相違点
- 指導上の工夫
 - 生徒の自由な感想を引き出す
 - それに対する教師のフォロー



第3回 動物を悪者にしないために

- J-HABSのインストラクターを迎えて
 - 近くではいけないこと
 - さわってはいけないときは？
 - 一人歩きのイヌに出会ったときは
- 動物(相手)の視点を
繰り返し示す



まとめ

- HAB教育のメリット
 - 子どもたちの関心が高い
 - 楽しく授業ができる
 - 生命について深く考えることができる
- HAB教育のポイント
 - 既習内容の活用
 - 相手(動物)側の視点の提示



21世紀 子どもたちを支える動物たち
公益社団法人 日本動物病院福祉協会 CAPP活動から

2009.12.12



公益社団法人日本動物病院福祉協会 顧問
赤坂動物病院 院長
柴内 裕子



ヒューマン・アニマル・ボンドHAB
(人と動物との絆)
人類は自然の中で動物の一員として
人間としての感性を育て、今日に至った



人と動物との相互作用


- 高齢者は未来の話題を
- 通院少なく、投薬少なく
- 入院日数の短縮、健康で在宅が長くなる
- 高齢者の健康を支える社会的経済負担の軽減に



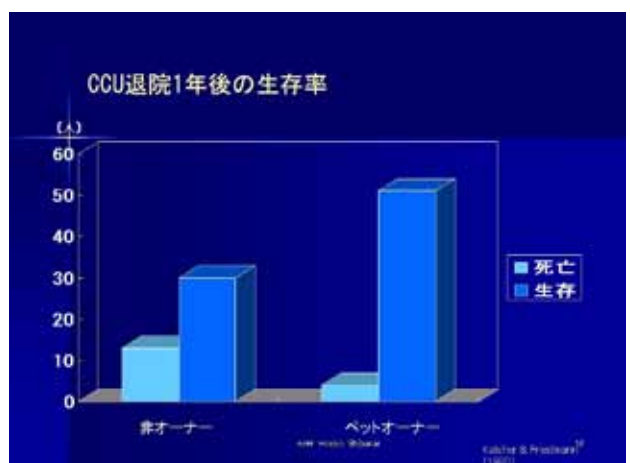
人類は動物たちがそばにいと

注目

- 緊張がほぐれ笑顔となり声が出て、身をかがめ、能動的になる
- 動物たちは人に内在する優しい言葉や思いやりの動作をごく自然に引き出す名手です



■ 動機づけ



今注目される「アニマルセラピー」 メディアの造語

動物介在活動 動物介在療法 動物介在教育

AAA



AAT



AAE



- この3つは明確に分けられている

AAH HAKU SHIKUO

12



信愛病院作業療法

AAH HAKU SHIKUO

13



AAA、AAT、AAEは全て
共通のヒューマンアニマルボンド
=HABの理念に基づいて
実践されている

- 人と動物の相互作用から生まれる効果をAAA(福祉) AAT(健康) AAE(教育)に生かす
- そのことは動物たちの福祉、健康、教育でもある



AAH HAKU SHIKUO

14

近年AATを活用している 医療現場

- 慢性疾患、精神科、リハビリテーション、高齢疾患、小児科、腫瘍性疾患、ホスピス等に



AAH HAKU SHIKUO

15

動物介在活動 (AAA)

- 動物たちとの触れ合い活動
- 正しいしつけと健康管理をされた動物たちとふれあうことによって、生活の質を高め、ポジティブな生活への動機づけ、きっかけづくりとなる



AAH HAKU SHIKUO

16



ホスピス病棟

AAH HAKU SHIKUO

17

動物介在療法 (AAT)

- AATは人の治療(医療)に動物を介在させる補助療法の一つ
- 医療従事者(医師・療法士等)がその患者様の治療を目的にプログラムを作り、それに適した動物を介在させて行う治療で、経過を記録し、効果の判定までを行う



AAH HAKU SHIKUO

18

動物介在教育 (AAE) (ヒューマンアニマルボンド教育)

- 子供たちが、この時期に自然や動物とふれあい、優しさや思いやりの心を直感し、体得することは、ヒューマンな脳の発達に、温かい感受性豊かな人間形成に大切な役割を果たします。



AAH HAKU SHIKUO

19

動物介在教育(AAE)

- 動物との正しいふれあい方
- 動物を悪者にしない(人の接し方によって)
- 動物の正しい世話の仕方
- 野生動物はペットではない
- 不幸な動物を増やさないために
- 動物たちのために自然を大切にしよう等々



AAE 11/2000 26/0000

人と動物とのふれあい活動 Companion Animal partnership program CAPP活動

- 動物介在活動 AAA
- 動物介在療法 AAT
- 動物介在教育 AAE



厚生労働省認可(社)日本動物病院福祉協会
(JAHA)の社会貢献活動

AAE 11/2000 26/0000



AAE 11/2000 26/0000

(社)日本動物病院福祉協会 CAPP活動の実績

- 1986年～2009年3月
- 全国活動回数 10,300回
- 事故 0 アレルギー 0
- 全国80チームが共通の基準を守る
- 参加動物の育成・ボランティアの養成



AAE 11/2000 26/0000



AAE 11/2000 26/0000

聖路加国際病院小児病棟における CAPP活動2003年3月より132回

- 日本で初めての小児病棟への訪問
- 月2回(45分)の訪問



医師の許可を受けた子どものみ参加

AAE 11/2000 26/0000

注意欠陥多動性障害 (ADHD) や 行為障害 (CD) 児への動物介在教育

- 落ち着き、攻撃性の低下、周囲との協調性、学習性、自己の行動制御、出席率等に効果がある

- アーロン キャッチャー、サムエル ロス



AAE 11/2000 26/0000



千葉県こども病院

AAE 11/2000 26/0000



子供たちの社会化の決定的な時期

- この感受性の高い時期は出生から10才までの脳のハードが完成するまで、無意識と直感の年代です
- この時期に体感、体得したことは、無意識に脳に擦り込まれて、脳の発達の基盤となります



渋谷区立臨川小学校 (つくし学級) 1~6年生

- 動物に優しくしよう、季節をみつけよう等々
- READプログラム、区立図書館で



CAPP訪問活動マニュアル 指導者用



社団法人 日本動物病院福祉協会
Japanese Animal Hospital Association (JAHA)
The Japanese Animal Hospital Association
1-1-1, Higashi-Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0801, Japan

READプログラムは

- 教育の専門家(教師)とプログラムを作成
- 現場の進行と記録と結果を検討する



活動動物

- 一般活動
 - 年一回の健康診断
 - 行動学的診断
- 医療施設
 - 年二回の健康診断
 - 年二回の腸内細菌検査
 - 行動学的検査
- 前日にシャンプー、歯ブラシ等全身のケア



伴侶動物と暮らすことで



- 0才児から犬や猫と暮らすことで、アレルギー性鼻炎や結膜炎の発症が低い
- 兄弟の多い子供、農場に育った子、発展途上国の子供たちも
- スウェーデン小児アレルギー専門医学会

動物介在活動/療法/教育は 世界共通の基準で行う (JAHA CAPP活動マニュアル)

- 参加動物は一般家庭の飼い主と家族としての動物たち

適性

- 人が大好き
- 適性のない動物にはストレスを与えることになる
- ストレスのある動物では相手に良い影響は与えることは出来ない

活動動物は一般家庭の家族、 幸せに暮らしている



© 2008 NPO 動物愛護協会

17

豊かな？先進国の悩み

- 核家族化・薄くなった家族・親族のつながり
- 低出生化・ひとりっ子、いじめの問題
- 人間性喪失社会・周囲への無関心
- コンクリート化・心の豊かさ・潤い・ぬくもりの喪失
- 高齢化・仕事・愛情等の心の支えを失った人々
- 都市化・人と人の絆の希薄化
- 犯罪の低年齢化・判断力を失う、不安定な情動「キレ」

© 2008 NPO 動物愛護協会

18

保護動物の幸せ



© 2008 NPO 動物愛護協会

19

今 日本は？

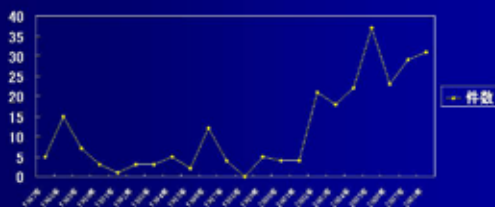


- 日本人の平均寿命 世界最長
- 日本人の出生率 世界最小
- 最も長寿なのに子供を生み育てる力を世界で最も失ってしまった
- 35,000人以上の自殺者

© 2008 NPO 動物愛護協会

20

公益社団法人 日本動物病院福祉協会の CAPP活動で行われた AAE(主に小学校への訪問活動)



- 活動の大半が単発的であったが、近年その内容が重視され、継続的の申し出が多くなっている

© 2008 NPO 動物愛護協会

日本における家庭内暴力の発生

- 2004年 14,410件
- 2005年 16,888件
 - 殺害に及んだ 78件
 - 暴力に及んだ 202件
 - 傷害に及んだ 887件



© 2008 NPO 動物愛護協会

21

IAHAIO リオ宣言(2001年)

- 動物介在教育のガイドライン、コンパニオンアニマルとの正しいふれあいを通じて、道徳的、精神的、人格的成長に役立てる
- 学校教育への導入 教育目的
- 動物の条件 動物への配慮



© 2008 NPO 動物愛護協会

22

日本では今

- 犬 1,250万頭以上
- 猫 1,245万頭以上



旧総理府調べ

日本の15才以下の子どもはおおよそ1700万人？

© 2008 NPO 動物愛護協会

23

21世紀にこそ

- 人類のそばに動物たち(自然)が必要
- 環境の変化・社会の変化・家族の変化を補う
- 人の福祉と健康と教育のために動物達が必要



© 2010 NPO 動物愛護協会

27

今望まれること

- 動物や自然を介して、安全な社会を支える人を育てること



© 2010 NPO 動物愛護協会

28

いつも活動にご協力
ありがとうございます
ございます

Human Animal Bond



これからも大切に進めましょう

© 2010 NPO 動物愛護協会

29

アニマルセラピーの現場再現 (動物介在教育)

Animal Therapy Demonstration

柴内 裕子 公益社団法人日本動物病院福祉協会 顧問 赤坂動物病院 院長
Hiroko SHIBANAI Advisor, Japanese Animal Hospital Association (JAHA) Director, Akasaka Animal Hospital



只今から
(公益社団法人)日本動物病院福祉協会の
人と動物のふれあい活動
(Companion Animal Partnership Program)
CAPP活動による
動物介在活動/動物介在療法/動物介在教育
AAA AAT AAE
のデモンストレーションを行います。
CAPPボランティア(ハンドラー)と
セラピー犬です



人と動物とのふれあい活動は
世界共通のヒューマンアニマルボンド
=HABの理念に基づいて
実践されています

人と動物の相互作用
から生まれる効果を
人と動物の福祉と
健康と教育に生かす
活動です



JAHA CAPP
動物介在活動
Animal Assisted Activity
AAA
活動動物は全て一般家庭の家族として健康
で幸せに暮らしている動物たちです
本日の高齢者はCAPPボランティアの皆さん
です
高齢者施設の場面です



動物介在活動 (AAA)

- 動物たちとの触れ合い活動
- 正しいしつけと健康管理をされた動物たちとふれあうことによって、生活の質を高め、ポジティブな生活への動機づけ、きっかけづくりとなる



5

作業療法・理学療法のプログラム

- ブラッシング
 - スカーフ結び
 - ボール(お手玉投げ)
 - フラフープ飛び
 - 散歩
- 本日のプログラム

AATは医療の専門家によってプログラムから結果の判定まで全てが行われる



10



7

近年AATを活用している医療現場

- 慢性疾患、精神科、リハビリテーション、高齢疾患、小児科、腫瘍性疾患、ホスピス等に



11

JAHA CAPP 動物介在療法 Animal Assisted Therapy AAT

人の治療を目的に適性のある動物を介在させます

作業療法士 福田美穂 信愛病院

理学療法士 三上彩子 信愛病院

本日の患者さんはCAPPボランティアの皆さん



11

ブラッシング



12

動物介在療法 (AAT)

- AATは人の治療(医療)に動物を介在させる補助療法の一つ
- 医療従事者(医師・療法士等)がその患者様の治療を目的にプログラムを作り、それに適した動物を介在させて行う治療で、経過を記録し、効果の判定までを行う



12

スカーフ結び



13

お手玉投げ



14

動物介在教育 (AAE) (ヒューマンアニマルボンド教育)

- 子供たちが、この時期に自然や動物とふれあい、優しさや思いやりの心を直感し、体得することは、ヒューマンな脳の発達に、温かい感受性豊かな人間形成に大切な役割を果たします。



フラフープ



15



16

散歩



18

分かってあげよう犬のこと 近くではいけないこと

1. 急に触らない
2. 大きな声を出さない
3. 急に走らない

• 何故？



20

動物介在教育 Animal Assisted Education AAE



17

さわってもいいですか？



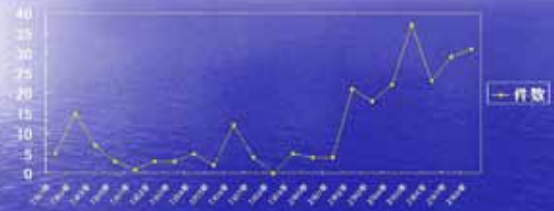
21

触ってはいけないときは？

- 食事中
- 睡眠中
- オモチャを齧っている時
- 子犬を抱いている時
- 飼い主に抱かれている時
- お店(コンビニ等)の前に繋がれている時
- 働いている時
- 車の窓からのぞいている時
- 垣根の中にいる時



公益社団法人 日本動物病院福祉協会の CAPP活動で行われた AAE(主に小学校への訪問活動)



- 活動の大半が単発的であったが、近年その内容が重視され、継続的の申し出が多くなっている



28

ひとり歩きの犬に出会ったら (飼い主のいない犬に)

動物を患者にしないために
木になろう



22

今注目される 「アニマルセラピー」 メディアの造語

動物介在活動 動物介在療法 動物介在教育

AAA

AAT

AAE



- この3つは明確に分けられている

27



文字離れ、読解力を養う

24

活動動物

- 一般活動
 - 年一回の健康診断
 - 行動学的診断
- 医療施設
 - 年二回の健康診断
 - 年二回の腸内細菌検査
 - 年二回の口腔内細菌検査
 - 行動学的検査



- 前日にシャンプー、歯ブラシ等全身のケア



26

READプログラムは

- 教育の専門家(教師)とプログラムを作成
- 現場の進行と記録と結果を検討する



25

動物介在活動/療法/教育は 世界共通の基準で行う (JAHA CAPP活動マニュアル)

- 参加動物は一般家庭の飼い主と家族としての動物たち

適性

- 人が大好き
- 適性のない動物にはストレスを与えることになる
- ストレスのある動物では相手に良い影響は与えることは出来ない



29

活動に行く前に

- * 活動前のケアー
(前日または当日の朝)
 - ・シャンプー、ブラッシング
 - ・爪きり(やすりかけ)
 - ・耳、歯、肛門、指間のケア
- * 動物の状態の最終確認
 - ・元気、食欲など



30

CAPP活動の実績

- ・1986年～2009年3月
- ・全国活動回数 10,300回
- ・事故 0 アレルギー
- ・全国110チームが共通の基準を守り、参加動物の育成とボランティアの養成をしながら、活動を進めている



34

活動にあたって

- 訪問現場でリーダーがリチェックする(心、体)
- 飼い主(ハンドラー)は全身を刺激のない消毒液で清拭する
- 活動中のストレスサインを読む
- 終了後のミーティングが大切



31

皆さんありがとう 世界に誇るCAPP活動の実績

JAHAのCAPP活動は、1986年にスタート以来、お陰様で23年間事故もアレルギーもなく、10200回の活動が行われました。これは全国のボランティアの皆様、そして良いこに育った家族としての犬、猫さんたちの大きな御協力のお陰です。これからも心引き締めて温かい家庭・安全な社会造りに努力しましょう。

動物介在活動/AAA動物介在療法AAT/動物介在教育AAE
適性があればどなたでも参加できます
協会にご連絡下さい

JAHA CAPP活動

公益社団法人 日本動物病院福祉協会
電話 03-3235-3281
FAX 03-3235-3277
E-mail capp@jaha.or.jp



35

しつけは陽性強化法

- 自発的に行う良い行動を褒めて、褒めて身につける
- 十分に社会化が来ている



32



CAPP活動は

- 1987年に目的を同じくする全国の動物病院が正会員となって、発足した現公益社団法人日本動物病院福祉協会の医学と獣医学を通じて社会に貢献するボランティア活動
- CAPP活動は1986年にスタート
- 世界共通のヒューマン・アニマル・ボンド(人と動物の絆)の理念と基準
- 動物介在活動(AAA)、動物介在療法(AAT)動物介在教育(AAE)



33

